

NEWSLETTER

ISSN 2186-9812

東シナ海沿岸地域からの展望—2016年度九州巡検—

香川大学 村山 聡

2016年9月15日木曜日から18日日曜日にかけて、村山FSのメンバーである渡辺和之氏ならびに中村治氏の参加を得て、また東昇氏の講演会を目指し、熊本地震の被災地である西原村から出発して、天草諸島を経由して、島原半島の西海岸、島原市の本光寺にある常盤歴史資料館を最後の訪問地とする巡検を行った。このニュースレターはその報告である。なお、写真はすべて村山による撮影である。

9月15日木曜日：自然災害・公害とLiving Spacesに関する視察

- 6:08～ 9:47 高松駅～岡山駅・博多駅～熊本駅（JR）
- 9:50～10:05 トヨタレンタカー熊本駅前（レンタカーの利用手続き・利用開始）
- 11:00～13:15 西原村視察
- 13:15～15:15

○ 高速道路利用（益城熊本空港インター～日奈久料金所）

15:15～17:00 水俣病資料館の視察

▷ 鹿児島県出水市

9月16日金曜日：行政組織として的大江組に関する上田資料館での資料調査

10:00～10:30

○ 三和フェリー（鹿児島県出水郡長島町蔵之元港～熊本県天草市牛深港）

13:00～16:30 上田資料館（天草市天草町高浜南598）にて文書閲覧及び京都府立大学
東昇氏との研究打ち合わせ

▷ 熊本県天草郡苓北町富岡

9月17日土曜日：入植地大矢野町の村落立地の視察と移住に関する講演会出席

9:00～12:00 上天草市大矢野町上・中・登立の村落景観等の視察

13:30～15:00 京都府立大学 東昇氏講演会「旧高浜村庄屋上田家と信州真田家」（天草
交流文化館：天草市船之尾町8-25）に出席

16:15～16:45

○ 島鉄フェリー（熊本県天草市五和町鬼池港～長崎県南塩原市口之津港）

▷ 長崎県雲仙市小浜町雲仙

9月18日日曜日：鎮護の寺院立地に関する視察と藩政の菩提寺資料館における資料収集

8:30～10:30 雲仙市小浜町雲仙・真言宗満明寺及びその周辺の視察

11:00～12:00 雲仙市南串山町・真言宗一乗院（満明寺の本院）視察

15:15～16:45 曹洞宗本光寺・常磐歴史資料館における資料収集

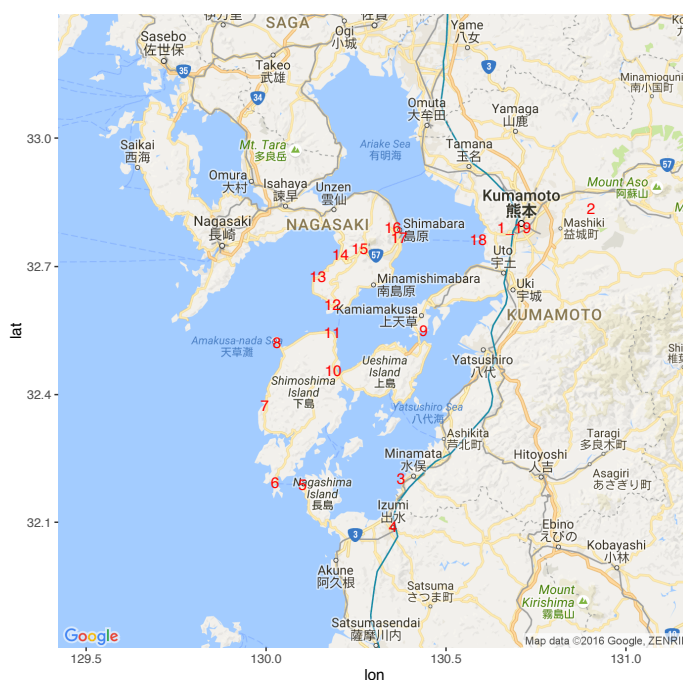
17:30～18:10

○ 熊本フェリー・オーシャンアロー（長崎県島原市島原外港～熊本県熊本市熊本港）

18:10～18:40 熊本港～トヨタレンタカー熊本駅前（レンタカーの返却）

19:26～23:09 熊本駅～博多駅・岡山駅～高松駅（JR）

上記は当初に予定した巡検日程である。それぞれの曜日に一つ一つの巡検目的を設定している。フェリーの乗船時間なども含め、地理上の行程を考慮し、出発前まで旅程の調整を行った。



Rの'ggmap'で作成

ID	目的	日程		訪問地	Latitude	Longitude
1_19	始点・終点			JR熊本駅	32.790161	130.68943
2	巡検 1	2016.9.15	11:00～13:15	西原村（熊本県）	32.834825	130.90301
3	巡検 2		15:15～17:00	水俣病資料館（熊本県）	32.203521	130.374713
4	宿泊 1			鹿児島県出水市	32.090572	130.352753
5	港 1	フェリー乗船（10:00）		鹿児島県出水郡長島町蔵之元港	32.188254	130.10162
6	港 2	フェリー下船（10:30）		熊本県天草市牛深港	32.19407	130.024936
7	資料調査 1	2016.9.16	13:00～16:30	上田資料館（熊本県）	32.374687	129.996196
8	巡検 3	2016.9.17	9:00～12:00	上天草市大矢野町（熊本県）	32.551039	130.4377
9	宿泊 2			天草郡苓北町富岡（熊本県）	32.521132	130.030874
10	講演会 1		13:30～15:00	天草交流文化館：熊本県天草市船之尾町8-25	32.457149	130.186519
11	港 3	フェリー乗船（16:15）		熊本県天草市五和町鬼池港	32.546746	130.18453
12	港 4	フェリー下船（16:45）		長崎県南塩原市口之津港	32.610989	130.184709
13	巡検 4		17:15～18:00	雲仙市南串山町・真言宗一乗院	32.677516	130.144194
14	宿泊 3			長崎県雲仙市小浜町北本町	32.72825	130.207118
15	巡検 5	2016.9.18	10:30～11:30	雲仙市小浜町雲仙・真言宗満明寺	32.741078	130.26053
16	資料調査 2		13:00～15:00	曹洞宗本光寺・常磐歴史資料館	32.791488	130.352376
17	港 5	フェリー乗船（15:45）		長崎県島原市島原外港	32.768523	130.370016
18	港 6	フェリー下船（16:25）		熊本県熊本市熊本港	32.763547	130.590064

訪問する海洋は、有明海、島原湾、八代海、東シナ海、天草灘そして橘湾である。これらの海に囲まれた熊本県本土、熊本県に属する天草諸島、鹿児島県そして長崎県に属する島原半島を廻る巡検を計画した。天草諸島の南東部には獅子島と長島があり、両島は鹿児島県に属する。江戸期にも薩摩藩に属していた。最終的な旅程では最終日とその前日の夕方の訪問先の再調整を行った。宿泊地を雲仙市小浜町にし、雲仙市南串山町にある真言宗一乗院を9月17日に訪問し、次の日に雲仙普賢岳の地獄谷近くの山の上にある真言宗満明寺を訪問することにした。後にも述べるが、この変更により、旅程がスムーズになり、さらに幸いにもタイミングが良く、一乗院のご住職、西秦仁氏と奥様からお話をお伺いすることができた。

1. 9月15日木曜日：自然災害・公害とLiving Spacesに関する視察

1-1. 11:00～13:15 西原村視察：

熊本学園大学藤本啓延氏の案内により、被災地を中心に村落の被害状況ならびに村落景観の視察を行った。湧水を中心とした村落立地はわずかな立地の違いと家屋や土台の構造で被害に大きな差のあることがわかった。また、被害の多い地域では、おそらく江戸時代から存続していたと思われる石垣のほとんどが大きく崩れ、地震のすさまじさを物語っていた。湧水あるいは水路を中心に構成される伝統的な村落立地は、地震以外にも大雨の被害も受けやすく、それ故に集落立地は一定の地理的構造を有することも推察され、村落立地の数理地理モデリングを考える上での貴重な材料を得ることができた。また、浄土真宗本願寺派慈雲寺ならびに真宗大谷派真成寺の視察では、熊本藩独特の「手永」という支配体制において複数の村落を統括する惣庄屋制がしかれ



西原村の真宗大谷派「真成寺」も被災した。



大切畑ため池周辺では、全面通行止めとなっている県道熊本高森線の復興工事がなされている。



ていたため、今回の視察で観ることができた矢野家のような在野の武家の存在が村落立地や寺院立地にも重要な影響を与えていることが観察され、東シナ海の天草諸島を中心とする地域観察においても内陸部の地域把握も重要であることを改めて認識することができた。結果として、重点観察地域の領域決定の要因として水系と支配体制の比較が重要であることが確認できた。



新井神社（左）と湧水の水源から汲み上げられている（右）（地震で玉垣の一部が倒壊）



左の写真は矢野家の入り口である。矢野家は、安政2～6（1855-9）年にかけて、大切畑ため池の築造を行った矢野甚兵衛を先祖とすると思われる。矢野甚兵衛は、この地域の複数の村落の惣庄屋であった。鳥子川のため池も熊本藩主細川家は水田振興策の一環と考えられる。水田と畑の分布はこの新たな水系も含めて独特の地理的分布が観察できる。熊本地震の際にこのため池が決壊の危機にあるとして周辺住民に避難勧告が出された。その後、決壊の不安は消えたが、分水施設の破損により大量の漏水が発生し、ため池の水を抜き、水を安定して流下させる措置が取られた。



左の地図は、明治34年測図、大正15年修正測図そして昭和6年部分修正測図された地形図の一部である。現在の熊本県阿蘇郡西原村は昭和35(1960)年に、山西村と河原村が合併して両村の一字一つを取り成立した村である。大切畑のため池を見ることができる。ダウンロード先は後述するスタンフォード大学サイトである。

1-2. 15:15～17:00 水俣病資料館の視察：

新日本窒素のような化学工場の立地が人々の生活に与える影響は計り知れない。石牟礼道子氏の『苦海浄土』は村山FSのナラティブアプローチの貴重な材料であるが（本年2月、藤原辰史氏

における村山IS研究会での報告を参照)、それと同時に多くの同時代の証言の記録があることもわかる。さらにこの悲惨な民衆の歴史は、日本の石灰窒素事業や電力開発事業と密接に関わっており、その歴史的な淵源は日本において水力発電事業が開始される明治20年代まで遡り、さらに、朝鮮進出や第二次世界大戦の影響などの壮大な歴史的变化が水俣病の淵源にある。村山FSの視野にはこのような歴史的背景も含め、水俣病研究にも新たな一章を論ずることができ、可能性を今後考えていきたい。

水俣病資料館を視察したのち、鹿児島県出水市で宿泊し、翌日、鹿児島県出水郡長島町蔵之元港から熊本県天草市牛深港を経て同市崎津および大江に向かった。



水俣病資料館内部および水俣病研究センターの玄関



水俣病資料館



蔵之元港から牛深港へのフェリーより



蔵之元港に到着する直前に、ポテトハウスという休憩所ならびに現地の産物の販売所（「道の駅 長島」）がある。さらにそこから見ることはできたのは甘藷（サツマイモ）の段々畑であった。

左のフェリーは三和フェリーで、牛深港から蔵之元港に到着したフェリーである。折り返し、このフェリーで、天草諸島・牛深に向かい、さらに天草での最初の視察地である崎津・大江を訪れた。



崎津諏訪神社



崎津資料館「みなと屋」



「みなと屋」から崎津の天主堂が見える。



崎津の天主堂



大江の天主堂

2. 9月16日金曜日：行政組織として的大江組に関する上田資料館での資料調査

2-1. 13:00～16:30 上田資料館（天草市天草町高浜南598）にて文書閲覧及び京都府立大学東昇氏との研究打ち合わせ：

世界遺産に向けて、天草市は大きく動いている。とりわけ、崎津の観光地化への変化は大きい。それに対して高浜は、隠れキリシタンが発覚した文化年間において、飛躍的な発展を遂げたが今は過疎化に喘いでいる。江戸期には、一日目に視察

した熊本本土と制度的に少し近い、複数の村落を統括する大庄屋制がしかれ、都呂々、福連木、下津深江、小田床、高浜、大江、今富、崎津の村落が一つの大江組という行政単位で統括されていた。

大江組には大江村に居住する大庄屋がいるが、商業活動も活発に展開し、また、国学に熟達していた高浜村・上田家の上田宜珍はとりわけこの地域の支配体制において中心的な役割を果たした。また、江戸時代から陶石業を継続している上田家は、上田宜珍の時代を中心とした江戸期の膨大な文書群を現代にまで伝え、上田資料館を運営している。これまで20年近く、共同研究者である東昇氏と上田家文書を整理してきたが、段ボールで5箱以上の新たな文書が発見された。当時の行政形態を知ることのできる文書群であり、新たな資料整理が必要であることがわかった。また、今回の巡検では、大江組に属する崎津や大江も訪問し、近年の「世界遺産」運動がいかに集落の今後に影響を与えるかについても観察することができた。江戸時代を出発点とする集落立地やその文化的景観は大きな変動の時代を迎えている。「世界遺産」運動に密着することは村山FSアクションリサーチとしても重要であることを確認した。



干潮時の高浜川：近くに上田家がある。



上田家の庭園



新しく発見された史料



左の写真は江戸期天草の行政の中心地・富岡の南に位置する天草の苓北火力発電所：九州電力のホームページによると、苓北発電所は、海外炭を燃料とする火力発電所で、熊本県内の最大電力需要の約6割をまかなう出力140万キロワットの大容量火力発電所である。右の写真は天草上島から大矢野島への眺望。



3. 9月17日土曜日：入植地大矢野町の村落立地の視察と移住に関する講演会出席

3-1. 9:00～12:00 上天草市大矢野町上・中・登立の村落景観等の視察：

数理地理モデリングでは村落間の距離や道程が分析上の中核となる変数である。村落の中心地をいかに確定するかは簡単な問題ではない。大矢野島の三村落の位置関係は現地視察をして初めて明確になった。また、島原の乱などの騒乱や江戸時代の行政組織の形が文化的景観に与えた影響は大きく、喪失した人口は新たな入植で取り戻された。さらに明治以降特に産業革命以降の護岸工事や水利施設の開発は地域環境を決定的に変化させた。上天草市大矢野町登立荒木浜は近世および近代の護岸開発や水路建設によって水田地帯になっていったようである。



上天草市大矢野町荒木浜周辺



堰の祠の住吉神像

文政10（1827）年、定免制で税額を確定するために作成された地誌的叙述では、登立は畑地が中心で、大潟海面干潟は十町四反余りあるが、うまく開発ができていなく収獲なしとなっている。開発できているのは4畝のみである。長年、新田開発の願望が村には（あるいは領主側に）あったように見受けられる。登立村全体としては、漁方稼ぎの村だったようである。家数は510軒、男1,831人、女1,765人、合わせて3,596人と江戸期では例外的に大きな村だったことが分かる。

さらに同地誌では、肥後藩へ海上1里、筑後柳川へおよそ27里、島原城下へ7里など天草諸島から東北方面に渡る港湾の中心地であったことがわかる。この港湾は、荒木浜とは異なる。現在の荒木浜周辺では、海老の養殖場が広がっており、小さな港湾もあるが、堰のあたりは港湾地区のようには見えない。にもかかわらず、航海安全の神である住吉神像の祠が可動堰の上に安置されている。その理由はなんだろうか。江戸期にはやはり港湾としての機能もあったのか。海の安全を祈る神社は堰の建設によって消えたのか。その淵源を辿る必要があることが今回の巡検で明確になった。

村落・地域間ネットワークの変遷を観る際にはやはり近代における歴史的変化をいかにプロジェクト研究に組み込むかが重要である。大矢野島にある三つの集落、上、中、登立において、とりわけ登立の港湾事情は簡単ではない。今回訪問したのは登立の荒木浜であるが、さらに3kmほど北に登立の中心地がある。この港湾が江戸期から継続した流通・交通の拠点であったと考えられる。下記の地図で、登立町と記載のある部分であり、港町が発展していたようであり、街道沿いに民家が建ち並んでいる。それに対して、荒木浜周辺では水田が広がっている。今後のさらなる調査が必要である。

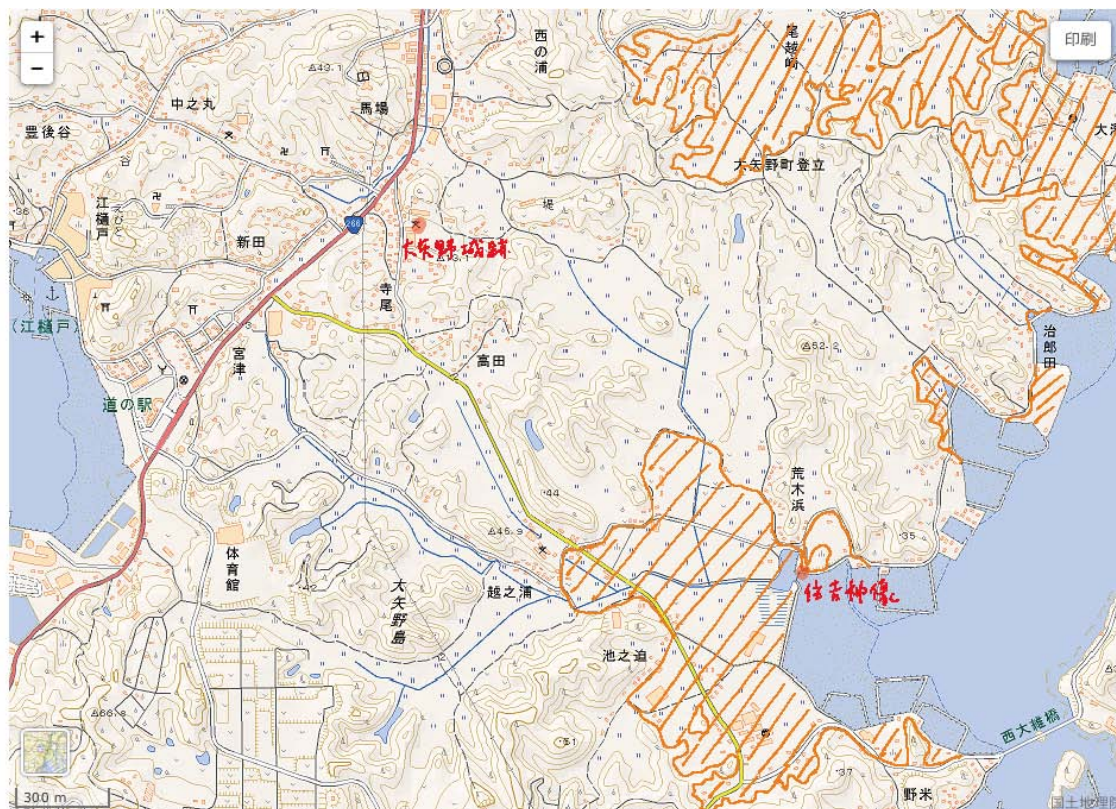


明治34年の測量図に基づき、大正14年に修正測図そして昭和7年に部分修正測図がなされた日本軍参謀本部の地形図より（ダウンロード先は本文で記載しているスタンフォード大学のサイト）

上天草市の市港湾一覧 (<http://www.city.kamiamakusa.kumamoto.jp/q/aview/317/741.html>)によると、平成20年5月14日付で「上天草市に10港あった港湾を上天草港として統合し、各港をそれぞれ港区とした」という。すでに熊本本土と架橋されている大矢野島内の港湾としては、旧登立の三角港登立地区が1,060haと最も大きな港湾である。この港湾は県の管理港湾である。なお、上天草市全体では、大矢野島とは方角的には逆の南側、下島の東南端の桶島と対峙する龍ヶ岳町高戸にある樋島港区が最も大きく、1,900haある。

前頁の地図は、明治34年の測量図に基づき、大正14年に修正測図そして昭和7年に部分修正測図がなされた日本軍参謀本部の地形図である。スタンフォード大学が所蔵地図を5段階の解像度でダウンロードできるようにしている (<http://stanford.maps.arcgis.com/apps/SimpleViewer/index.html?appid=733446cc5a314ddf85c59ecc10321b41>) (青木高明氏からサイトの紹介を受けた)。国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスでもダウンロードできるが上記のような解像度の地形図をネットで得ることはできない(服部亜由未氏によればハードコピーの取り寄せによりデジタル化を進めないと高い解像度の地形図を得ることはできない)。この昭和7年に修正された地図によると、住吉神像の祠のあったところにはすでに堤防はあるが、可動堰ではなさそうである。水田地帯は広がっているものの、一部湿地帯も残っているように見える。

下記の地図は国土地理院が運営している地図・空中写真閲覧サービスで提供している2万5千分の1地形図の一部であるが、標高0mから1m地帯をマークすると下記のようなオレンジの斜線



国土地理院地図・空中写真閲覧サービス提供の地形図から大矢野地区をスナップショットした地図に加筆。

部分となる。あくまでも暫定的なものである。北海道大学提供しているサイトにグーグルマップから緯度経度情報だけではなく、標高や水深を提示する地図 (<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10795/Latlonele.html>) で確認したものである。現時点での標高であり、さらに検討が必要であるが、住吉神像の位置を確認するために、この水門の名称を上天草市のサイトや海岸線の整備や防災関係のさまざまなサイトを検索したが、名称と由来を得ることはできなかった。幸い『上天草市史・大矢野町編』が古代から現代まで完結しているので、まずは同書で確認をする予定であるが、県や市の関係者への問い合わせもいずれ行う予定である。

以上のような探索の過程で、上天草市の教育委員会が文化財として紹介している大矢野城跡に関して興味深い記述 (<http://www.city.kamiamakusa.kumamoto.jp/q/aview/408/1318.html>) を発見した。「大矢野城（中村城）は、元寇（げんこう）の乱で活躍した大矢野氏の居城で、城の造りは平山の城に分類されて」いる。「築城の年月日は不明」だが、「当時の地形から満潮時は、三方海に面する海城（うみしろ）」だったというのである。城は慶長2（1597）年以降から使われなくなったが、寛永14（1637）年の「天草・島原の乱で、一揆軍が城を修復して立て籠もろう」とした。「しかし島原の原城を本陣としたため、城を放棄したまま原城へ移動した翌日に、三角に集結していた肥後細川軍一万六千人が大矢野に上陸して、城は破壊され」たという。

現在の地形図から見た時、前ページの大矢野城跡が三面、海に囲まれるというのは想像しがたい。しかし、先のオレンジ色のマークでわかるように、現時点でも標高1m以下の地点を確認するならば、その事実を知ることができる。城跡の西南方向、旧上村の海岸線は江戸期から決定的な変更はないかもしれない。それに対して、旧中村ならびに旧登立村の海岸線は護岸工事や水門、樋門などの建設で16世紀から大きく変更された可能性がある。まさに江戸初期の水田開発の動きと連動していると考えて良いように思われる（武井弘一『江戸日本の転換点一水田の激増は何をもたらしたか』（NHKブックス1230、2015年）。島原の乱で荒廃した大矢野島は後の入植で急激な人口増加を経験しており、ほぼ皆無となった人口は、元禄4（1691）年にはすでに三村で4,092人となり、その後も増加し、文政10（1827）年には12,419人と1万人を超え、文久元（1861）年には16,056人となる。

本稿で特に取り上げている荒木浜は、旧登立村の南限、旧中村との境界線にあり、現在の水田地帯は江戸期には干潟であった可能性も高いが、先に述べた大潟海面干潟は前ページの地図の上部にあり、荒木浜の南西方面は江戸期にはすでに水田開拓が進んでいた可能性がある。再び住吉神像への疑問が出てくる。どの時代のものであろうか。このあたりが満潮時には海となっていた時期なのか、その後の時代なのか。まずは、上天草市の教育委員会等に問い合わせをする必要がある。

なお、この大矢野島地域を巡検の対象の一つとして選んだのには理由がある。天草諸島に関して、地誌的な叙述に基づき数理地理モデリングを進めているが、村落間の距離情報を得ることができるのが文政10年のデータであり、例えば、上村から中村まで5里、登立村まで15里などの記

載がある。このデータに関して、二つの問題点があった。グーグルマップなどで出てくる村落間の距離は村の中心地からもう一つの村の中心地までの道路上の距離である。各村の中心地の緯度経度情報があれば直線距離を計算することもできる。先のように干潟などがある場合には迂回するにしても、村落間距離の江戸期の記載では、一つは村の中心地から隣の村の境界線までの距離を表す場合と、場合によっては、一つの村から次の村を横断し、さらに隣村との村境までの距離を表している場合があるということが考えられる。今回の巡検で、少なくとも中村と登立村との境界線の位置は明確となった。さらに、村落間を結ぶ道を考える場合、海岸線や河川の流路の変化についての注意が必要である。

3-2. 13:30～15:00 京都府立大学 東昇氏講演会「旧高浜村庄屋上田家と信州真田家」（天草交流文化館：天草市船之尾町8-25）に出席：

高浜村の庄屋上田家は信州の出身である。東氏の歴史資料に基づく分析と推察は、戦国の動乱期から江戸時代にかけて、そして、江戸時代において武家も含めて、民衆が村落に居住することの意味を改めて考える機会を与えてくれた。人の移動や移住も村落立地の研究には極めて重要であり、一村落研究では、見落としがちな広域の地域ネットワークや支配関係の論理を明らかにしてくれる。地域研究においては、地域の領域的境界を設定せざるを得ないが、定住しない人々や遍歴する人々あるいは寺社のような広域ネットワークあるいは伝統的風習などの文化的な共通性などに着目することによってその方法的限界を緩和するくふうが必要であり、今後の課題の一つを確認することができた。

天草文化協会創立70周年記念事業

第1回天草あったか出前講座

戦国武将 真田幸村と同族の上田家(旧姓 遊野)が、大阪の陣で敗走し、天草に隠遁して399年。「天草島鏡」を著わした天草第一の国学者・上田宜珍、官選県知事(宮城・岐阜)や九州電力社長だった上田万平を輩出した名門・旧高浜村庄屋上田家を、上田家研究の第一人者・東昇准教授が読み解く。

日時 平成28年9月17日(土)
受付 13:00 講演 13:30～15:00

場所 天草文化交流館 (旧天草教育会館 駐車場が狭いのでバスなどご利用ください)
天草市船之尾町8-25 ☎27-5665

演題 「旧高浜村庄屋上田家と信州真田家」
講師 京都府立大学文学部准教授 東昇先生

参加費 無料 資料代 200円
※参加費は9月31日(水)締切厳守で、10月1日にお返金にて住所・電話番号・人数を記入して、天草文化協会事務局(天草市船之尾町11-4 本連地区公民館内)へお申込みください。

旧高浜村庄屋 上田家屋敷 (国登録有形文化財)

上田宜珍 肖像画

【主催】天草文化協会
【共催】上田神社協議会(天草市天草町高浜)
【後援】天草市教育委員会、上草市教育委員会、天草市教育委員会、熊本日日新聞

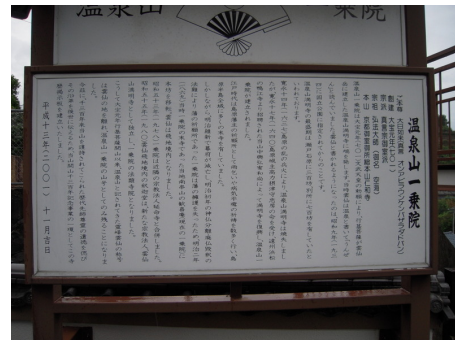
【お問い合わせ】
天草文化協会事務局(協力)
☎090-4779-4040



東昇氏の講演の様子。200名を超える聴衆があり、会場は満席であった。

3-3. 16:45～18:15 長崎県雲仙市南串山町（真言宗一乗院視察）：

一乗院ではご住職の西泰仁氏ならびに奥様（旧姓・福田でご親戚は満明寺のご住職をされているらしい）に直接お話を伺うことができた。雲仙の語源は「温泉」（うんぜん）である。この淵源は多数の僧坊をそなえた満明寺にある。江戸期においては、寺院はキリシタン弾圧の行政的な拠点となっており、島原の乱以降、特に曹洞宗の寺院がこの任にあたった。高浜の場合も



大江組全体を監視していたのは曹洞宗の江月院であった。宗門改による住民の寺への所属が旦那制度の出発点である。しかし、寺院や僧坊が立地した理由として、奈良・平安の時代の主流は鎮護国家のためであり、また住民の平穏を祈願する祈祷所でもあった。多数の僧院・僧坊を抱えた真言宗の満明寺は島原藩の祈祷寺でもあったが、明治に入り、藩の後ろ立てを失い、檀徒たちが住む雲仙の麓に新たに一乗院として寺院を構えることになった。村落立地を考える場合、寺社との関係は決して簡単ではない。西氏のお話においても、僧侶や仏閣がキリシタン大名によって悉く破壊されたことや、また、一乗院の檀徒は、南塩原全域に及んでいることなど、村落ネットワークを考える村山FSにおいて寺社研究は重要な研究課題であることを確認することができた。また奥様の親戚が雲仙普賢岳の麓にある満明寺のご住職であることも確認できた。

4. 9月18日日曜日：鎮護の寺院立地に関する視察と藩政の菩提寺資料館における資料収集

4-1. 10:30～11:30 雲仙市小浜町雲仙・真言宗満明寺及びその周辺の視察および

4-2. 13:00～15:00 曹洞宗本光寺・常磐歴史資料館における資料収集：

満明寺の寺院立地と地獄谷との位置関係を視察した後、島原市へと移動し、本光寺・常磐資料館を訪問した。深溝（ふこうず）松平家の菩提寺であった瑞雲山本光寺境内に設けられた資料館内には、島原の乱後の寛文9（1669）年に徳川幕府の命により福知山（京都府）から移封され明治まで島原を統治してきた島原藩主深溝松平家ゆかりの絵図、書簡、古文書、仏教美術などが展示されている。数ある貴重な史料のなかで、屏風に張られた島原の領国絵図は、村山FSにとって極めて貴重な史料であることがわかった。詳細な情報が公開されておらず、現地で確認することによってのみ正確な情報を得ることができた。満明寺にある僧坊や僧院などが一切書かれておら



明治2(1869)年、神仏分離令を受け、地獄谷(右下)近くの満明寺(左上が昔の山道、右上が現在の本堂)は島原藩の後ろ盾を失い、本坊を現在の雲仙市南串山町の末寺歎喜庵に移転し雲仙の境内は飛び地(一乗院釈迦堂)となる。しかし、明治31(1898)年に火災で釈迦堂と護摩堂を焼失した。昭和51(1976)年、雲仙南串山の一乗院釈迦堂境内が雲仙山大乗院満明寺の寺号を御室派本山の仁和寺より受けた。その後、昭和55年(1980)年、雲仙山満明寺が南串山町の温泉山一乗院から正式に独立し、法類寺院となった。



曹洞宗本光寺(右が入口の案内板)は、深溝松平家の菩提寺であり、本堂に隣接して、松平家の移築された住居が常盤歴史資料館(「ながさき歴史・文化ネット」<http://nagasaki-bunkanet.jp/institution/>常盤歴史資料館(本光寺資料館)/)である。資料館内には、島原の乱後の寛文9(1669)年に徳川幕府の命により福知山(京都府)から移封され明治まで島原を統治してきた島原藩主深溝松平家ゆかりの絵図、書簡、古文書、仏教美術などが展示されている。同寺に伝承されていた資料をはじめ、廃藩置県以後、全国各地に散逸していた深溝松平家の資料を第三十四世黙翁仙定大和尚と第三十五世文翁片山秀賢大和尚の父子二代に渡って収集されてきた民間コレクションである。現在のご住職は片山弘賢氏である。



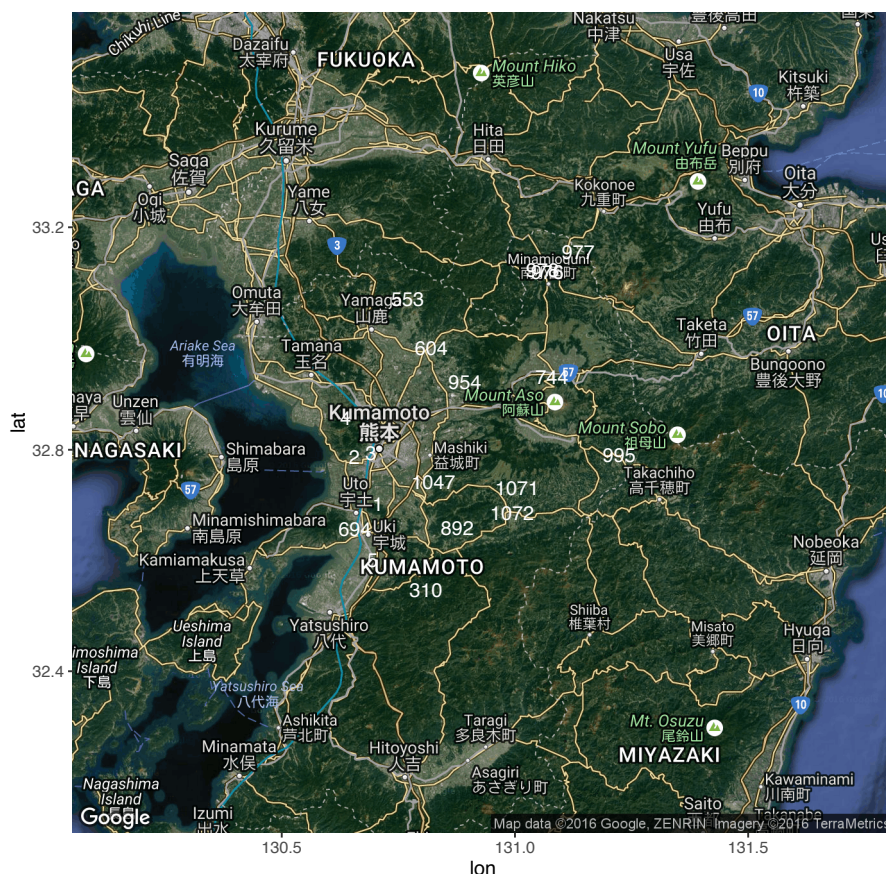
ず、その弾圧の様子が見て取れるし、さらに、各村落については、一般的な国絵図のように小判型で村名が記されているのではなく、村名が四角の別紙に書かれたのが貼られているようであり、さらに、村名が墨消しされ、後の時代の書き込みがあることも伺える。さらに文献調査で、島原半島は旧南高来郡であり、明治26(1893)年の町村要覧は村山FSの中核史料である地誌であることが判明しており、島原半島全域の村落情報を得ることできることを確認しており、この地誌とこの絵図との組み合わせはこれまで得られていない知見につながることがわかり、さらに数理地理

モデリングの分析に際に加味する必要のある係数や変数の検討につながる。また、前記のかくれキリシタンに関する世界遺産化の運動では、逆の仏教弾圧の事例も極めて重要であり、今後のアクションリサーチにおいても重要な研究拠点になることは疑いがない。今後の資料整理や新たなインタビューなどの計画を立てる必要があることを確認した。

5. まとめ—寺院立地とLiving Spaces—

納骨堂info (<http://www.nokotsudo.info/list/kumamoto.html>) が紹介している熊本県のお寺の数は1,194ヶ寺に及ぶ。ただし、過疎化などにより廃寺になっていることも多く、すべてのお寺の所在確認ができるわけではない。江戸期に関して、圭室文雄「熊本藩の天台宗寺院の実態」（『明治大学教養論集』、382(2004)、1-25頁）によると、当時の寺院数は957ヶ寺であったという。浄土系（浄土宗・一向宗・時宗・融通念仏宗）が504ヶ寺（52.7%）、密教系（天台宗・真言宗・山伏・日蓮宗）が302ヶ寺（31.6%）、禅宗系（臨済宗・曹洞宗・黄檗宗）が151ヶ寺（15.8%）である。寺院数からは浄土系が圧倒的なのだが、圭室氏の分類によれば（同論文、1頁）、この浄土系の中でも一向宗系列がひととき目立つ存在であり、西本願寺派が334ヶ寺、東本願寺派が96ヶ寺で、この両者だけで440ヶ寺（約46%）となっている。さらに興味深いのは、これらの寺院の成立年代が寛永10年代（1633～43年）に集中していることである。まさにキリシタンの取り締まりと連動する宗門改帳が徳川日本において全国的に導入される時期でもあり、すべての日本の住民はどこかの寺に属することが義務づけられた、寺請制度が成立した時代である。この前後に熊本にも一向宗が進出し、「葬祭（滅罪）檀家を独占する」ことになったと圭室氏は指摘している。熊本藩の領域では、同氏の試算で、全体の92%の個数を浄土系ならびに浄土真宗系が押さえることになった。

50%強に過ぎない系列の寺院がほぼ熊本藩全域の檀家を独占していたことになる。寺檀制度と一般に理解されるが、宗派によって寺の立地と位置づけが大いに異なることがわかる。この点、雲仙の満明寺と一乗院の事例でも確認できたが、明治維新後の廃仏毀釈で決定的な変化を被った寺院と

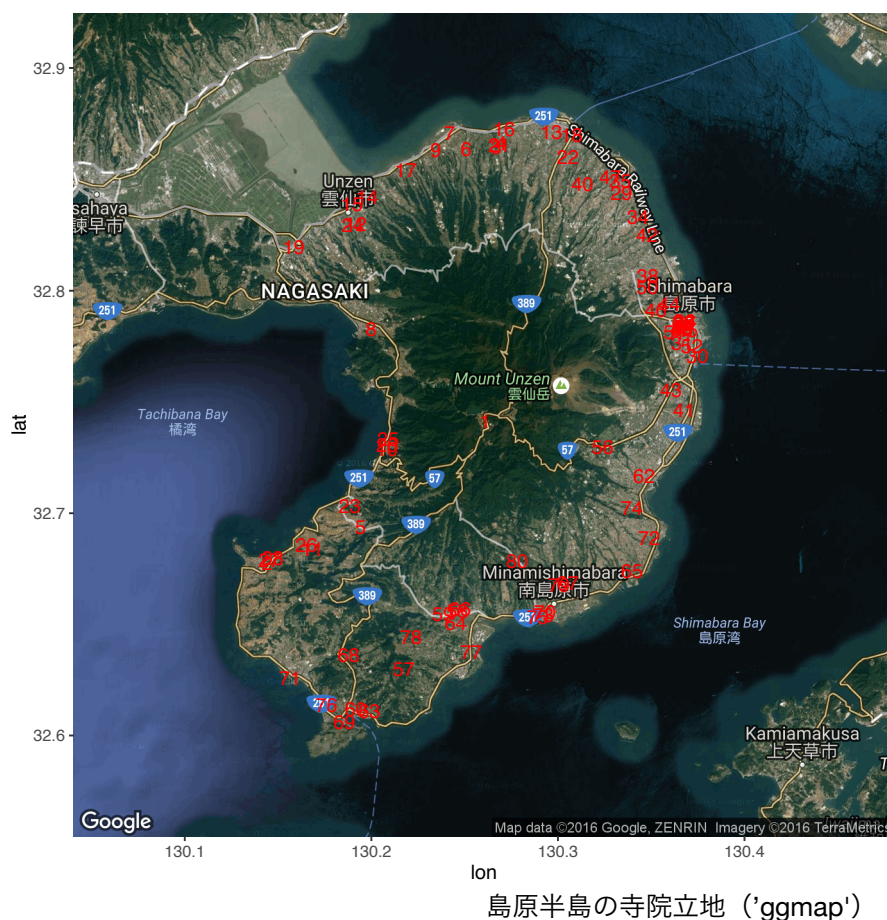
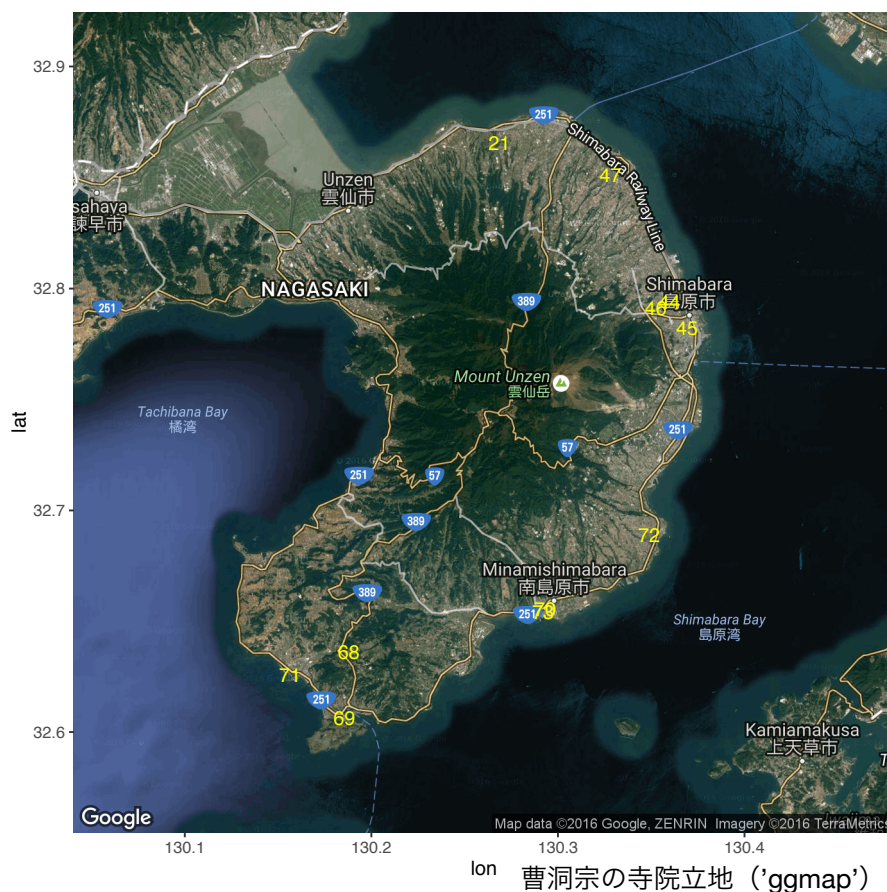


熊本県における天台宗の寺院 ('ggmap')

して天台宗の寺院が挙げられる。江戸期に112ヶ寺あった寺院は100ヶ寺が廃寺となっている。現在では19ヶ寺が天台宗の寺院として確認できるが、その寺院の位置を熊本県の地図上にプロットしたのが前頁の地図の白のID番号である（なお、本章の地図はすべてRの'ggmap'で作成している）。このような寺院の立地や廃仏棄釈後にも何らかの復活が見られるのはなぜか。檀家制度的な存在意義以外にも寺院立地の意味があるということであろう。その点、Living Spacesとして「どこにすむ？」を問題にする村山FSでは、このような寺院立地も視野に入れる必要がある。

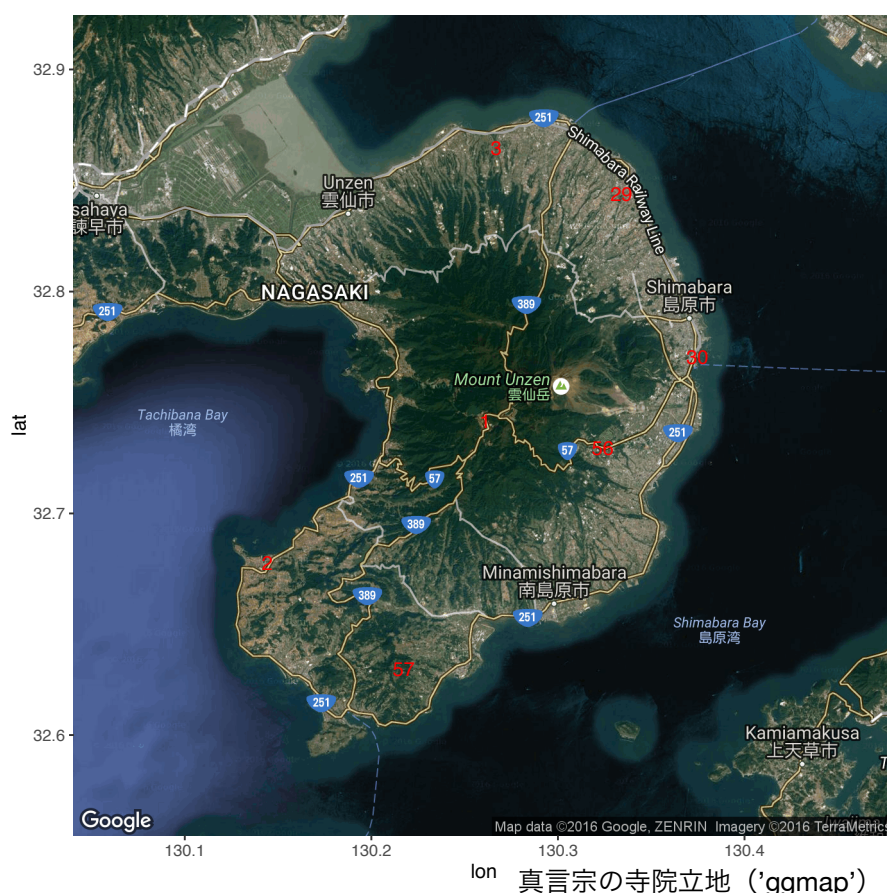
例えば、最終日に訪問した島原市の本光寺は曹洞宗であるが、島原藩主の菩提寺であった。また、島原藩では祈祷寺として雲仙地獄谷に隣接する満明寺を守っていた。鎮護国家と民の安寧を祈願・祈祷する寺院の系列と各村落における死者や宗教の管理行政の主体となった寺院とは区別をする必要がある。

すでに述べたように曹洞宗は、この地域では島原の乱の後に、隠れキリシタンの管理主体となっ



ていった。前頁、右上の地図の黄色の ID 番号のプロットは、曹洞宗の寺院の立地を示している。島原半島の東側そして島原の乱の中心地に立地のあることが興味深い。

前頁、右下の地図では、島原半島の全寺院を赤の ID 数字でプロットしている。寺院立地が集落の立地と連動していることが地形上よく見えるが、真言宗などの寺院に多い山寺などの立地も反映している。最後に掲げた右の地図は、真言宗の寺院の立地である。平野部と山岳部の両方にその立地を見ることができる。ID1 が満明寺であり、ID2 が一乗院である。



集落立地と寺院立地さらには上記でみた住吉神像が祀られているような祠あるいは多くの寺社の立地なども今後、調査研究を続けていく予定である。人の居住地と神や仏の所在さらには多くの道路建設や港湾建設などによる Living Spaces の変容、さらには、多くの物資の流通の変化など、Living Spaces を取り巻く状況は、例えば、今回取り上げた地域で、東シナ海特有の要素を見出すことができるのであろうか。あるいは、日本全国共通の要素の方が影響力は強いのであろうか。水田稲作重視の開発の歴史が島原半島でも色濃く見られるが、同時に、江戸時代の文書ではしばしば唐芋と呼ばれる甘藷畑が幾重に積み重ねられた段々畑の景観は北の国々では見られないであろう。夏に多雨・温暖な気候は独特の生業空間を生み出してはいたはずである。唐芋栽培の空間配置はさらに検討を進める予定であり、すでに対馬については、東シナ海沿岸地域の地域研究の一環としてその分析を開始している。